

2018年9月23日 川越教会

一つの人生、一つの選択

丸山 勉

【聖書】 詩編 16 編 8～11 節

わたしは絶えず主に相對しています。主は右にいまし
わたしは揺らぐことはありません。
わたしの心は喜び、魂は躍ります。からだは安心して憩います。
あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなく
あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず
命の道を教えてください。わたしは御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い
右の御手から永遠の喜びをいただきます。

【序】 小山京子さんの告別式を通して見つめさせて頂いたこと

一昨日の9月21日・金曜日は、私たちの教会の仲間であった小山京子さんの告別式をこの教会堂で致しました。小山さんのご家族はもちろん、ご親族も多くかけつけて下さいました。礼拝の形での告別式、そしてその後の教会からの出棺、また、火葬の時も含め、それは確かに人間的にはとても悲しい事でありますけれども、しかし、神様の恵みの中でその営みがなされたことを覚えました。改めて、私たちのこの与えられた命、人生を深く見つめさせて頂く時を、このことを通して与えられたと思っています。

私自身、まだ気持ちが告別式の延長線上にあります。また今日は、当日ご出席された方も、それが叶わなかった方もおられると思いますので、このことを通して神様が私たちに対して語られていることを私なりに受け止めさせて頂き、分かち合わせて頂きたいと思いました。今日は、先ほど読んで頂いた詩編 16 編から味わってみたいと思います。「聖書教育」誌が取り上げている、士師記のサムソンの物語は、来週味わうことにさせて頂きたいと思えます。

【1】 神様ご自身を「わたしの幸い」とする

詩編の 16 編は「ダビデの詩」となっていますが、必ずしもダビデ個人の詩と捉えなくても良いと思います。詩編の中には、ある無名の詩人、或いは信仰共同体がダビデの名を用いて歌った詩もあるようです。そのことは、この詩が、ある特定の歴史に限定されない、現代の「私たちの詩」にもなることでもあります。

この詩は、交読文でも初めの 1 節からお読みして感じられたと思いますけれども、神様への賛美と確信に満ちています。また、その調べは明るいものです。そして、

この詩編は、実は旧約聖書の中でも驚くような、既に新約聖書を先取りしているかのような、復活の命、永遠の生命を指し示してくれているように思います。最後の10～11節をお読みします。

「あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなく／あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず／命の道を教えてください。わたしは御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い／右の御手から永遠の喜びをいただきます。」

この16編は、イースターの時にもしばしば読まれる詩編ですが、その理由も分かりますね。

ただ、この詩の初めは——初めだけは、と言ったほうが良いでしょうか——若干の暗さを持っています。神様に切実に、嘆願しているのです。1節。

「神よ、守ってください／あなたを避けどころとするわたしを。」

この詩人は、ただ気分で神様を賛美しているのではなく、神様に訴えているのです。この私をどうか守って下さい、私はあなたの御手を避難所とします、と。

そしてこの詩人は、2節以降、他の神々や偶像ではなく、聖書が証しする唯一の神様に寄り頼む人生の幸いを歌っています。2節の言葉は言い切っていますね。

主に申します。「あなたはわたしの主。あなたのほかにわたしの幸いはありません。」

さらに、5～6節にはこうあります。

「主はわたしに与えられた分、わたしの杯。主はわたしの運命を支える方。測り縄は美しい地を示し わたしは輝かしい嗣業を受けました。」と。

矢内原忠雄氏は、詩編の『聖書講義』の中で、この6節の「測り縄」について、このように語っています。

＜「測り縄」とは土地の割り当てをする時に用いる縄です。私はよい分け前を嗣業として貰ったものだなあ。世の人は沢山の土地、沢山の酒を貰ったと言って喜んでおるが、私は神様ご自身、即ち神様の愛を貰った。沢山の財産とか食物とか健康とかは私の分として下さらなかったが、神様を貰った。本当によいものを貰ったものだ」と。

「主はわたしに与えられた分」、そうです、主ご自身こそが、私の幸いの源なのだ、いや、幸いそのものなのだ、と言っているのです。どんなに自分自身に欠けがあっても、弱さがあっても、それで私と神様の間は切れない。いや、逆なのです。矢内原忠雄の言葉を借りますと、「私は、沢山の財産とか食物とか健康とかは私の分として下さらなかったが、神様を貰った。本当によいものを貰ったものだ」。

[2] 主は私の運命を支える方

先日、小山京子さんがこの教会で一緒に教会生活をされる中で、折々に週報の「コラ

ム」欄にお書きくださった文章を、執事の方が、ご家族、ご親族の方々にコピーしてお渡し下さいました。私も拝見させて頂き、「ああ、京子さんはこのような信仰を生きてこられた方だったのだな」と感動しながら読ませて頂きました。その中から、二つのコラムを抜粋してご紹介させて頂きたいと思います。

一つは、2011年7月17日の週報からです。

「川越教会に戻り6ヶ月が過ぎようとしています。最初の礼拝の折、T.I 兄の病の重さを知らされました。突然のことでびっくりしました。思わず祈りました。そし家族の祈り、牧師の祈り、教会の方々の祈り、多くの方々の熱い祈りが幾重にも重ねられました。祈りは聴かれました。神様ありがとうございます。本当に感謝します。

今、私自身はどうなのかと問いかけます。昨年2回の緊急入院をしてから、健康に自信が持てず臆病になっている自分がいます。礼拝も席に置くだけの頼りない自分がいます。それでも聖書にしがみつき、御言葉にしがみついて、天を仰ぎ見ると、立ち上がる力と励ましを与えられます。「神は言われた。『光あれ。』こうして光があった。」(創世記 1:3) 朝の目覚めがあり、感謝の祈りから一日が始まります。主こそ光、希望の光です。」

もう一つは、それから約三年後の2014年3月16日の週報からです。

「私は昨年末からウイルス性結膜炎を患い、2ヶ月程で症状は落ち着きましたが、視力への影響が残って大好きな聖書を読むことがままならず大変なショックでした。御言葉に聴くこともできない！神様は、私の一番大切なものを取り上げられるのか！これでは教会にも行けなくなってしまう！と、苛立ちと淋しさ、不安でいっぱいになりました。私にとって教会は自分を支える唯一の場所で、生きる力なのです。神様どうぞ御力をお与えくださいと、必死に祈りました。

そのような中で気付かされたのは、主婦としての働きが残されていたことです。料理をしていると、不思議と心が落ち着くのです。永年の経験にも助けられ、脳の活性化にもなっていました。この頃はライトを明るくすることで、ユックリながらも、どうにか聖書を読み、書きとるように努めています。また、教会での学びと交わりは、自分を整えていく大きな支えとなっています。主に導かれ、祈りに支えられる日々を取り戻したいと心から願い祈っています。「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ。(Ⅱコリント 12:9)」

一本当に素晴らしいお証しだと思いました。

時に、私たちは人生に恨み言を言いたくなる時があると思います。自分ではどうしようもないことが自分の身に降りかかってくる場合があります。病気もそうでしょう、家族のこと、また、経済問題で苦しむこともそうでしょう、また、何でこのタイミングでこのようなことが起こるのですか？神様は一体何を考えておられるのですか？私をいじめるのですか？と言いたくなるのが、人生にはしばしばあるのではないのでしょうか？

しかし、この詩編 16 編の中で、詩人は 5 節でこう告白しました。

「主はわたしの運命を支える方」と。「運命」と言うと、既に定まっている「運命論」として捉えがちになりますが、そうではないと思います。ここでの「運命」は、私は「時」と言い替えても良いと思います。「主は私の時を支える方」だと。

他の詩編の中にこういう言葉があります。これは口語訳聖書の言葉で紹介したいのですが、詩編 31 編の 5 節です。「私の時は、御手の中にあります」。

「時」というのは、残酷なものです。私たちは否応なく死に向かって流れていく時の中で呼吸をしていますし、時間と共に巡ってくる様々な出来事を避けて通ることが出来ません。また、過去にさかのぼることが出来ません。非情なものです。旧約聖書の「コヘレトの言葉」（伝道の書）の 3 章には、人生には様々な時がある——生まれるとき、死ぬ時、泣く時、笑う時、嘆く時、踊る時、求める時、失う時、愛する時、憎む時、戦いの時、平和の時などがある——と語ります。その上でこう記しています。「神はすべてを時宜にかなうように造り、永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業をはじめから終わりまで見極めることは許されていない」と。

私たちの人生は神様に問いたくなることの連続だといってもよいのではないのでしょうか？そして、問うことは、決して不信仰ではありません。けれども、その中で神様を見失ってしまわないようにしたいと思わされます。そういう只中でこそ、信じたいのです。「私の時は、御手の中にあります」、と。

[3] 「わたしは常に主をわたしの前に置く」

私のことを言って恐縮ですが、実はこの詩編 16 編が、私の最も愛する聖書の御言葉の一つです。特に私はこの 8 節が大好きです。この言葉だけを繰り返し唱えていて、ひどい落ち込みから光の中に移されたかのような経験をした時もありました。16:8 ですが、その時はまだ新共同訳ではなく、口語訳聖書の言葉で読んでいました。

「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない。」

この詩編は、先ほどから見ていますように、信仰者の喜びと幸いに満ちています。そしてそれは「与えられた」ものです。与えられている恵みなのです。言ってみれば、受動態、受け身です。5 節、6 節は殊にそうだと思います。けれども、この詩の中核には、この詩人の能動的、主体的な一つの決断、一つの選択があるのです。それが 8 節です。新共同訳ではこのようになっています。

「わたしは絶えず主に相対しています。主は右にいまし わたしは揺らぐことはありません。」

「相対する」でもよいのですが、ここは直訳すると、「私の前に」という意味合いの

言葉のようです。そこには、ハッキリとした意志があるのです。私は先ほどの京子さんの文章を読んで、この詩編 16:8 の御言葉に、見事に重なり合うものを感じました。

先にご紹介したコラムにはこのようがありました。

「昨年 2 回の緊急入院をしてから、健康に自信が持てず臆病になっている自分がいます。礼拝も席に置くだけの頼りない自分がいます。それでも聖書にしがみつき、御言葉にしがみついて、天を仰ぎ見ると、立ち上がる力と励ましを与えられます。」

また、結膜炎でこれでは聖書も読めない、教会生活も出来ないではないですか、と神様に訴える中で、このように導かれたと書いておられましたね。

「神様どうぞ御力をお与えくださいと、必死に祈りました。そのような中で気付かされたのは、主婦としての働きが残されていたことです」と、お料理に励まれるようになり、さらには「ライトを明るくすることで、ユックリながらも、どうにか聖書を読み、書きとるように努めています。…主に導かれ、祈りに支えられる日々を取り戻したいと心から願い祈っています。」

京子さんは、試練の只中で、一つの選択をされたのです。

「わたしは常に主をわたしの前に置く」という選び取りです。これが神様と私たちとの「生きた」関係ではないでしょうか。「貰う」だけですと、喜びにならないのです。「受ける」だけですと、かえって心が貧しくなることがあるのです。「受くるより、与えるは幸い」（使徒 20:31）というのは本当です。神様の恵みは、私たちに一歩踏み出す勇気を与えてくれるものです。その理由もここに記されています。

「主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない。」或いは、「主は右にいまし わたしは揺らぐことはありません。」と。

神様が私の右にいつもいて下さる。だから恐れることはないのだ、と。「右」というのは、力がある方向です。裁判の席でも弁護士は右側に立ち、罪を犯した者を弁護します。聖書はしばしば「神様の右の手で」ということを言います。これ以上ない、確かな守りです。

京子さんは生きようとする意志が最後まで本当に強かったです。そして、それは、いついかなる中であっても、神様によりすがろうとする信仰そのものであったと思います。けれどもその力は、京子さんの力でもあったでしょうけれども、それはさらに大きな支えの下にあってこそです。それは「主は右にいまし わたしは揺らぐことはありません」ということではなかったのでしょうか？それこそ、先ほどのコラムで引用されていた聖句の通りです。

「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ。（Ⅱコリント 12:9）」

〔結〕 わたしは御顔を仰いで満ち足りる

私たちの人生、色々な「時」があります。けれども最も尊い日は二つだと思えます。一つはこの聖書が示してくれる神様を「わが神」として主体的に受け入れる日です。「今や、恵みの時、今こそ救いの日です」と言われているその日です。(コリント二 6：2)。そして、もう一つは、この神様のもとに帰っていく日です。詩編 16 編の最後の部分をお読みします。

「あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなく／あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見せず／命の道を教えてください。わたしは御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い／右の御手から永遠の喜びをいただきます。」

矢内原忠雄氏は、先の詩編の聖書講義の中で、このように語っています。

「神様は神様のものとして私共をお取りになったのだから、心も霊も身体も悪しき者から護って下さる。これほど偉大な生命保険はない。私共はこの世に於いて学び得るだけ学び、教えられるだけ教わった時に召されますが、その時こそ、神様は私共を陰府に棄て給わず、墓に朽ちしめ給わずで、これは神様を信じる者、神様をば主と仰いでいる者の幸い、分、受くべきもの、分け前です。」

何という希望でしょうか！私たちはこの地上の生命が終わっても、この魂は暗い陰府に行くのではなく、御顔を仰いで満ち足りる、と言うのです。そして永遠の命の喜びを、それこそ、神様の右の御手から受け取るのですね。京子さんはその命をもうご自分のものとされ、この希望を私たちに見せて下さいました。

主イエス様が死んで、三日目に復活されたのは、私たちがこの永遠の命の喜びを受け継ぐその初穂となるためでした。そのために、主は、十字架にお架かりになり、私たちに**完全な愛**を示して下さいましたのです。そして今このイエス様は、神様の右の座におられ、私たちが**信仰と愛に生きることが出来るように**励まして下さいます。

この神様の御手の中にある私たちの歩みのひと時ひと時、また人生そのものであることを信じ、**安心して委ね、主の御足の跡に従ってまいりたい**と思います。主はどのような時も、私たちと共におられますから！。

お祈りを致します。